



Liberia Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1982 精道教育促進協会(音屋)三・三四五二芦屋市船戸町12-6

教皇様の叢

家族の使命

使徒教令「ファミリアーリス・コンソルツィオ」の抄訳。
公式訳は、いずれ中央協議会から出版されるはずだ。

愛は力

愛を基とし、愛から力をくみとる家族は、夫と妻、両親と子供、親類縁者からなる共同体です。家族の第一の仕事は、本ものの共同体の発展を目指して、努力をかたむけ、人と人との交わりを忠実に実現することでありま

夫婦の交わりは分かちえない

第一にくるのは夫と妻がうちたてて発展させる交わりです。結婚生活の契約のおかげで、男女は「もう一人ではなく、一体となり」(マテオ19・6)互いに全てを与え合うという婚姻の約束を、日々忠実に果しつつ、交わりをいよいよ深めていきます。

この夫婦の交わりは、男女間にある互いに補い合う必要をもとに、一生の計画をよることでわかち合うことよって成長していくものです。それゆえ、この種の交わりは、非常に人間的な必要をみだすみのりであると共に、

体にかかわる愛で、互いを与え合う男女が、同等に享受すべき尊厳に、一夫多妻は真っ向から対立するからです。第二ヴァチカン公會議が教えるように、主の確信をうけた婚姻の一性(一夫一婦制)は、相互の完全な愛のうち、夫と妻が平等に有する尊厳を考えれば、当然の結果であると思われま

分かち得ない交わり

婚姻の交わりの特徴には、一性、一夫一婦制のみではなく、不解消性が含まれています。「この深い一致は、ふたりの人間が互いに与え合うことであって、子供の善と同様に、夫婦間の完全な忠実を要求し、また夫婦間の一致が不解消であることを求める」(「現代世界憲章」48)

シノドスに参加した司教方にならない、この婚姻の不解消性について特に明らかに宣言することは、教会の根本的な義務であります。こんにち、一生の間ただ一人の相手に限られた生活をするようなことは、難しいとか、できないとか考える人々、また、婚姻の不解消性を認めず、忠実な夫婦を笑う者にするような傾向に巻き込まれた人々、このような人々に、夫婦愛は決定的(無条件的)性格をもち、キリストにその基と力があることを、はっきりと告げなければなりません。

夫婦が互いにあるところなく与え合うために、また、子供のためを考えても必要な婚姻の不解消性は、究極的には、神が告示しなされたご計画に則ったものです。神はこの不解消性をお望みにし、その旨明らかになさしました。それは、神の人間に対する、また主イエズスの教会に対する、絶対的に忠実な愛のみのり・しるし・条件として、でありました。

キリストは、創造主が男女の心に刻み込まれた最初の計画を新たにし、婚姻の秘跡で「新しい心」をお与えになりました。それゆえ、

夫婦は頑なな心を克服できるだけでなく、新約の永遠の契約、つまり、キリストの完全な愛をわかち合えるようになったのです。主イエズスは、「忠実な証人」、神の約束の「はい」であり(コリント後1・20参照)、よって、神の人々に対する徹底的に忠実な愛の実現であります。したがって、信者夫婦は、キリストをその花嫁である教会に結びつける取り消しのできない不解消性に、あずかるべく召されているのです。

秘跡のたまものはまた、信者夫婦への召しだしてあり命令であります。夫婦は、主のみに従い、あらゆる試みと困難をのりこえて、永遠に忠実を保ち合わねばなりません。実に主は、「神がお合わせになったものを離してはならない」(マテオ19・6)とおおせになりました。

こんにちの信者夫婦がなすべきいかにも貴く、また急を要する仕事、それは、婚姻の不解消性と忠実がもつばかり知れないねうちを身をもって人々に示すことなのです。これは、司教会議に参加された私の兄弟方の仕事でもあります。

数々の困難にもめげず、価値ある不解消性を保ち育んでおられる、多くの夫婦をたたく、励ましたいと思えます。つましから課せられた使命を果しておられる。すなわち、社会の中で、ときには誘惑におそれながらも、つねに新たな心で、神とイエズス・キリストが私たち一人ひとりにお示しになる限りなく忠実な愛の、小さくとも貴い「しるし」としての役目を果しておられるからです。それと共に、配偶者に見捨てられながらも、信仰の力とキリスト教の希望を支えとして、再婚しない人々の証言を、たたえたいと思えます。このような方々も、配偶者に対して本当の忠実を保ち、世界が必要とする忠実の証人となっておられるからです。

喜びと祈りについて

あらゆる種類の悪を避ける努力を!

「私の魂は主をあがめ、私の精神は、救い主である神によって喜びおどっています、主が、いやしいはしのためにおん目をとめてくださったからです。これからのち、代々の人々は、私を、さいわいな女と呼ぶことでしょう。全能のお方が私に偉大なことをなされたからです。その名前は聖く、…」(ルカー1・46〜49)

「全能のお方が私に偉大なことをなされた」と語る聖母は、お告げの時、みずからを「はしため」と呼び、マニフィカットの中でも同様に、「主が、いやしいはしのためにおん目をとめてくださった」と表現されました。

この主のはしのために私たちがどれほど愛していることでしょうか。すべてのものとすべての人、教会とこの世界とを私たちはどれほど深い信頼をもって聖母におゆだねしていることでしょうか。この聖母の「いやしき」は、どれほど多くのことを教えてくれることでしょうか。その謙遜は、神がご自身を聖母に啓示なさるための、いわば心の場をもうけることとなるのです。神がマリアを通して、代々にわたって、そのみ業を行なわれるために。マリアのことはまことに主を待ち望む望みに満ちています。これらのことばに耳を傾けずして神の降臨を「感じる」のは、むづかしいことでしょうか。

すべての人々への挨拶

私の喜びをお伝えしたいと思います。それは、神の御母が、「私をさいわいな女と呼ぶ」と断言なさっている「代々の人々」の中に、(今

をさかのぼる何年も前に)正式に始まったみさんの教区が含まれているからです。(…)

典礼のことば

(待降節の) 典礼は、マリアのマニフィカットのことは語りかけてきます。また、引き続き登場するもう一人の人物のことはを通して語りかけます。それは、ザカリヤとエリザベットの子ヨハネで、ヨルダンの近くで教えを説いていました。

ここにヨハネによる証言があります。最初は彼自身にかかわることはです。「あなたはエリアですか?」私はそれではない!あの預言者ですか? ちがう! あなたはだれですか? — 私は荒野に叫ぶものの声である。

ヨハネは声です。聖アウグスチヌスは見事に説明しています。「ヨハネは声である。これに対して、主(イエズス)については、『はじめにみことばがあった』と書かれている。ヨハネは過ぎ去る声であり、キリストははじめから存在する永遠のみことばである。もし声から言葉を取ってしまえば、何が残るだろうか。その意味が理解できないとき、そこに残るのは漠然とした単なる音にすぎない。意味のない声を聞くことはできても、それによって教えを得ることはできない。」(説教293、3 PL 38、1328)

このようにヨハネは、メシアでも、エリアでも、預言者でもありません。それでも彼は教えを説き、洗礼をさすげます。「それならなぜ、あなたは洗礼をさすげられるのですか」とエリザレムからつかわれた人々は尋ねます。

これが人々の関心の的でした。ヨハネはイザヤの道正しくせよ。そして聴衆が洗礼を受けたいという心は、ヨハネのことが人々に届き、人々を回心に導いたという印でした。そこで、エリザレムからつかわれた人々が尋ねます。「なぜ、あなたは洗礼をさすげられるのですか。(ヨハネ1・25)

ヨハネは答えます。「私は水で洗礼をさすげているが、あなたたちの中に、見知らぬ人が一人立っている。それは、私のあとにくる人で、私はそのはきものひもをとくねうちもない。(ヨハネ1・26〜27)

先に立つ人であるヨハネは、待ち望まれている方が、「彼のあとに」来られることを知っています。

ヨハネは、主の降臨のふれ役です。彼は、「あなたたちの中に、見知らぬ人が立っている」と教えます。

(待降節とは)ただの待ち時間ではありません。それは主の来臨の宣言です。ヨハネは言います。「来たるべき方はすでに来られた」と。

かつてマリアが、親族の一人でヨハネの母となるエリザベトを訪問した時、ザカリヤの家の前で語った言葉がそうであったように、ヨルダンの近くでのヨハネの言葉は、待ち望みの心にあふれています。

ヨハネのことは、たとえそれが三十年ののちに響き渡るにしても、主を待ち望む心でみちているのです。典礼は、マリアのことに現われる待ちのぞみとヨハネのことに現われる待ちのぞみとを一つにしています。ベトレヘムで、夜中に聖母の胎内からお生まれになるメシアの到来と、ヨハネが教え、洗礼をさすげていたヨルダン川のほとりへのメシアの登場は、聖霊の力でなされました。

主を待つ心

ヨハネのなみはずれた態度は注目に値しま

す。彼は言います。私は、私のあとに来る人のはきものひもをとくねうちもない。(ヨハネ1・27参照)

これは大変重要な仕事です。主を待ち望むとは、実際ひとつの態度を意味します。それは、ひとつの態度によって表わされるものです。ヨハネは、ヨルダン地方で、先に引用した言葉を使ってこうした態度を定義づけました。

これらの言葉を見ると、ヨハネが自分自身について言っていること、つまり彼がその到来を告げた方のふれ役だと感じていることがわかります。

主人のはきものひもをとくのが奴隷のしごとであることは、私たちも知っています。それでもヨハネは言います。「私は、彼のはきものひもをとくねうちもない。私にはねうちがない! 彼は自分が奴隷よりもいやしいと感じているのです。」

これが待ち望む態度です。教会は、その態度を全面的に受けとめ、教会のすべての司祭とすべての信者たちの口を通して、いつも繰り返すのです。「主よ、我は不肖のしもべです」。(日本では、聖体拝領前、他の言葉を使用)

そして、教会はこれらの言葉を、主が来られる前に、聖体にましますキリストの来られる前に、いつも唱えます。「主よ、我は不肖のしもべです。」

聖体拝領を前に、私たちが心をしずめ頭をたれて祈る言葉は、待降の心でみちています。こうした態度を何度も学んでいきましょう。

喜びと祈り

(…)聖パウロのテサロニケ人への前の手紙には、主の到来、神の来臨に向けられた待ち望みの態度が、私たち一人ひとりにおいてもっと深く実現されねばならないと説明しています。使徒は書いています。

「常に喜び。たえず祈れ。どんなことにも感謝せよ…霊を消すな。預言を軽蔑する

説教・講話・書簡等の抄訳

な。すべてのものを試してよいものを選べ。悪に類するものをみな避けよ。(テサロニケ人への前の手紙5・16、22)

この言葉は内的な態度を育てていく、いわば原理のようなもので、それによって、待降節が私たちの心の中で続きます。それは、今しがた聞いたように、喜びとたえざる祈りによって完成される態度のことです。喜びとたえざる祈りはいずれも、あらゆる種類の悪を避ける努力と関係があります。同時にこうした内的な態度は、あらゆる真実の預言に向かってひらかれた態度でもありません。その預言が神からくる場合は、啓示への信仰という形で表われ、また人間の側での誠実な探求の結果出てくることもあります。この態度は、すべての善良で高貴なことを受け入れるところに表われます。これを保っていくことによつて、人は、自分の魂の中に灯したあかりを消すことのないように、聖霊のはたらきかけを

司祭・預言者・王たるキリストの力にあずかる

① 「ガリラヤに行った十一人の弟子は、イエズスが命令された山に登り、イエズスに会ってひれ伏した。(マテオ28・16)(…)

(神の呼びかけを自由に受け入れたみなさんも神のみ前でひれ伏す用意があります。)

まもなく諸聖人の連禱を唱えますが、そのときひれ伏して、この聖所と聖なる瞬間をみたく、目に見えない神の威光を礼拝するのです。弟子の内には疑う者もいましたが、みなさんが疑うことはできません。できる限りしっかりとした確信をもたねばならないのです。

② (…)ガリラヤに行った十一人の弟子は、「私には天と地のいっさいの権威が与えられている。行け、諸国の民に教え、聖父と聖子と聖霊の名によって洗礼を授け、私が命じた

可能にしてもらえます。

使徒は「霊を消すな」と書いています。主を待ち望む態度は、聖霊のはたらきに対する内的な率直さ、聖霊のはたらきへの従順という形に表われるべきなのです。

ごらん下さい、このような態度を堅持するならば、平和の神は、私たちを完全に聖なるものとし、私たちの霊と魂と体を主イエズス・キリスト来臨のときまで、咎なく守ってくださるのです。(テサロニケ人への前の手紙5・23参照)

使徒パウロは、テサロニケ人への前の手紙の中で、このように最初のキリスト信者たちに教えました。彼の教えは今日でもなお、適切なものです。主を待ち望む態度は、神がイエズス・キリストにおいてこの世に來られたことをはっきりとさせてくれます。キリストが人間の歴史に入り込み、私たちに交じって生活し、同時に、この地上での生涯において

ことをすべて守るように教えよ。私は世の終りまで常におまえたちと共にいる。(マテオ28・18、20) というキリストのことばを聞きました。

みなさんは、キリストだけが持つ天と地のいっさいの権威のうちから、みなさんが行使すべき部分を受けることになりました。(…)

神の民のために、職位的(同時に位階的)司祭職を行使するみなさんは例外なく、司祭預言者、王たるキリストの権能に特別な仕方と与ることになります。この権能のおかげで、新約の神の民は、父と子と聖霊の一致、つまり神の一致のうちに集うのです。(…)

③ みなさんは、教会の声と司教の奉仕によって召しだしがためられる瞬間をじっと待

は、神との出会いの結果としての円熟と、キリストとの最終的な出会いにおける円熟ともたらしてくださるということが確実になるのです。

この態度を自分のものにしませう！
来る年も来る年も、来る日も来る日も学びましょう！

すでに來られ、そしてたえず來られ、また最終的に來られるのはどなたでしょう。

ごらん下さい、それは貧しい人々によい便りをもたらす、砕かれた心の傷をかい、内的、外的に自由をうばわれた人々に解放を、しいたげられた人に自由をかえすことを宣言する人です。

主は、主の恩寵の年を宣言します。(イザヤ61・1参照)(…)

主は喜んで待たれているにちがひありません。マリアとともに繰り返しましょう。

「私の精神は、救い主である神によって喜

っておられます。それはまた、いと聖なるご聖体の秘跡が、心のこもった世話をうけるためにみなさんの手にゆだねられる瞬間でもあります。ちなみにご聖体には教会の霊的な富がすべてふくまれています。(…)

教会がみなさん方になげかける問い、またみなさんが自分に問ひかける質問は、つまるところ、一つに要約されます。今日第一歩を踏みだしてのち、歩みを続ける道の途上で、恩寵に忠実であるかいなかという一点です。心に語りかける主のみ声に、そしてキリストの恩寵に、忠実であつたらうか。聖霊のみ声とその光と力に對して、何事がおころうともつねに忠実を保つたのだろうか。これからは忠実でありたいと願っているだろうか。(…)

④ 主の恩寵につながり呼びかけて、キリストの教会における職位的司祭職の、しるしと印象である秘跡をあえてさずけることができます。

びおどっています。(ルカー1・47)

主を待ち望む内的な態度が、すべての人中で花を咲かせますように。人生の終点に近づきつつある年輩の方に、そして今人生を始めたばかりの若者たちに。この態度は、あなた方の共同体とその周囲にわたって、浸透していくにちがひありません。それが家庭生活の雰囲気そのものになりますように。生活を打ちめす全ての悲しみや試練のただ中であつて、全ての人が成長し、円熟していきま

ように。苦しんでいる人たちがみな、主を待ち望む態度に、心のささえを見いだしますように。「私の魂は、神において、よろこびいさむ。主が、私に救いの衣をさせられたから。」(イザヤ61・10)

マリアの無原罪のみ心が、あなた方一人ひとりに、この世が提供しうるいかなるものよりも大きな救いの喜びを獲得して下さいますように。(一九八一・十二・十三)

神の霊がみなさんを導いてくださいますように。養子の霊をうけたみなさん自身が、「アツバ、父よ」とさけび、また人々にもそうするよう教えることのできるよう、主が助けてくださいますように。

キリストと共に神の世継ぎとなつたみなさんが、聖霊の光に照らされて、大いなる遺産を自分のためだけになく人々にもわけ与えることができま

ように。ただし、キリストと共に光栄を受けるために、その苦しみを共に受けるなら、私たちは神の世継ぎであつて、キリストと共に世継ぎ(ローマ8・17)になることを忘れてはなりません。生涯を通じて、生涯の最後の瞬間まで、つねにキリストと共に歩んでください。

このおごそかな瞬間、私はみなさん方一人ひとりを御母にゆだねます。(…)(三位一体の祝日に、聖ペトロ大聖堂で80名(内32名はオプス・デイのメンバー)の司祭を叙階されたときの説教)

不変の教え

良心と人間の内的尊さ

1 アンジェルスを唱えるために集う今、聖母マリアのご胎内で、聖霊の御力により、人となり給うたみことばに、しばし思いをさせることにしましょう。

同時に、次回のシノドスのテーマについて考えてみたいと思います。「教会の使命における和解と悔悛」という枠の中で、人間の自由と密接な関係のある良心、真理と良心との関係については先週お話ししました。(註)教皇様の声「八月号」の意味に注意を向けなければなりません。良心は、人間の内的尊厳のものとであると共に、人間と神との関係の土台でもあるのです。

2 『現代世界憲章』16番を読んでみましょう。「人間は良心の奥底に法を見いだす。この法は人間がみずからに課したものではなく、人間が従わなければならないものである。この法の声は、常に善を愛して行ない、悪を避けるよう勧め、必要に際しては『これをこなえ、あれを避けよ』と心の耳に告げる。人間は心の中に神から刻まれた法をもっており、それに従うことが人間の尊厳であり、また人間はそれによって裁かれる。良心は人間の最奥であり聖所であって、そこでは人間はただひとり神とともにあり、神の声が人間の深奥で響く。良心は感嘆すべき方法で、神と隣人に対する愛の中に成就する法をわからせる。良心に対する忠実によって、キリスト者は他の人々と結ばれて、ともに真理を追求し、個人生活と社会生活の中に生じる多くの道德問題を真理に従って解決するよう努力しなければならぬ。正しい良心が力をもてば、それだけ個人と団体は盲目的選択から遠ざかり、客観的倫理基準に従うようになる。打ち勝つことのできない無知によって、良心が誤りを犯すこともまれではないが、良心がその尊厳

を失うわけではない。ただしこのことは、真と善の追求を怠り、罪の習慣によって、しだいに良心がほとんど盲目になってしまった人にあてはめることはできない。

3 (以上のことばをゆっくりと黙想すべきたと思われまふ)。良心とは何であるかを正確に理解したでしょうか。良心の自由が何であるかよくわかっているでしょうか。個人、家族、社会生活を営むにあたって、ほんものの正しい良心に導かれているでしょうか。現代人は、暗く、にぶくなった良心、麻酔にかけられたような良心に従って生きているのではないのでしょうか。

「教会の使命における和解と悔悛」について考えるとき、今のべたような問いかけを自身自身になげかけてみれば、大変役に立つと思

愛するみなさん

われまふ。人々の良心、キリスト者の良心のために祈るうではありませんか、聖霊、人となられたみことば、ナザレトのマリアの御援けを願ひながら。(一九八二・三・十四)

日々、新たにキリストと一つになる

麦のたとえは、イエズスがお話になりましたが、とくにイエズスにあてはまると言えます。実に、地に落ちたのはイエズス、そして死去されたのも誰あろうイエズスであり、イエズスこそ、人々の救いに役立つ豊かで、美味い実りをもたらしてくださったからです。麦は、たわわに実りました。イエズスのみが私たちを養い育てる実りであるからです。

聖ヨハネの福音書によると、この点についてはイエズスご自身がお話になりました。「命のパンとは私のことだ。私に来るものはもう飢えることがなく、私を信じるものは、いつまでも渇きを知らないだろう。(ヨハネ6・35) イエズスだけが私たちの魂と生命の必要をみたすことができになります。主は、私たちの問いかけにこたえ、道を照らし、力を与え、つまり、私たちを御父との交わりに導き、永遠の生命を飢え渇くかのように望む心を見たしてくださいのす。ところで、以上のことをイエズスは十字架上の死によって実現してくださいました。

福音書には次のようなことばもあります。「私は地上から上げられて、すべての人を私のもとにひきよせる。主はこれによって、ど

んな死に方をするかをお示しになったのである。(ヨハネ12・33) 私たちが救われるためには主の犠牲が必要であったのです。愛ゆえにみずから余すところなくささげてはじめて、(ひきよせる力)つまり磁石でひきつけるように私たちの知性と心をひきつけて捉える力を得ることができのです。その結果、友人のために命を与える以上の大きな愛はない。(ヨハネ15・3)といわれるあの愛が実現します。これこそまさにイエズス・キリストが私たちのためにしてくださったことなのです。

ところで、麦のたとえ話は私たちキリスト信者をあらわしてもいます。イエズスもそのような意味あいをおおせになりました。「私に仕えたい人があれば従って来るが

よい。私がいるところには、私に仕える人もまたいる。(ヨハネ12・26) 洗礼を受けた私たちはイエズスと共に、イエズスのために、奉仕の交わりに召されました。洗礼をうけた人はだれでも、教会内で活動的な一員としての責任を負うよう召されています。神の子としての尊厳を充分自覚の上、キリストの証人となり、たえず内的に進歩する義務があります。預言者イエレミアはこの点を実にはっきりと教えてくれます。「私の民の奥深くに私の律法を置き、その心に記す。……彼らの中の、小さなものから大きなものいたるまで、私を認める。主のお告げ。(31・33、34) これは洗礼のとき私たちに起こったことです。しかし、私たちは日々、新たにキリストと一つになるよう招かれています。そのためには喜びにあふれ、謙遜に、信仰とキリストへの強く生き生きとした忠実を、日々あらたにしななければなりません。

このようなすばらしい目標を考えると、当然、誠実正直な心で糾明する必要があります。私はイエズスのあとならどこでも従っていつている、と心から言えるのだろうか、私がいるところには、私に仕える人もまたいる。」とおおせになったのに。イエズスはご自分を完全にささげてくださったが、私たちがどの程度じぶんをささげていると言えるのか。ほんとうに無私の心をもってると言えるのだろうか、キリストのため、人々のため、教会のために、キリストが十字架上で示してくださったように。仕えることよってのみ、つまり自分を捨てることよってのみ、私たちはキリストのように「多くの実」をみらせることができるのです。

みなさん、神のみことばの靈感に励まされて以上のようなことを考えることができました。これらを祈りに転じ、より深く心に刻みつけるよう努力しようではありませんか。(一九八二・三・二十六)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料六十円 一年予約七百二十円送料七百二十円 二十部以上の一括購入なら送料不要 替振郵便 神戸 3-72393